

桜井の昔語り

小川 勉 編

桜井を懐き故里

とする人々に贈る

はじめに

旧正月の元旦に金鶏が鳴かなくなった。

狐もだまされなくなった。丑の時まいりのなくなった。天狗もガタロも現れなくなってから久しい。それらの存在理由を見出してやるのは、むずかしいが、存在したのだという証明だけはしてやりたい気持ちになつて、桜井市についての既刊の書物から集めてみた。

まだまだ市民の人々の心の中に眠っている話も多いであろう。自由な時間がなかったので、目を覚まさせにまわることはできなかったが、これを機械に教えていただければと思います。

歴史、史実には、あまり興味を示さず、気ままに自分の気に入ったものだけ集めたもので、全体として伝説、昔話だけでもないので、「昔語り」とした。

「日本書紀」「古事記」「万葉集」「懐風藻」「謡曲集」(岩波古典文学大系)「桜井町史」「桜井町史統」「郷土」「大三輪町史」「大神神社資料」「大和の伝説」「風俗誌」その他からの引用も多いので、ここでお許しを乞いたい。

なお、米田富恵氏、米田一郎氏、その他の諸氏の協力をえたので、この機会に合わせて感謝の意を表します。

文体、ことば遣いも、ばらばらであるが、強いて統一しなかったことを最後に断っておきたい。

小川 勉

(桜井市西本町三丁目)

楠掘山のふっくり	(今井谷)	70	三輪上人慶円	(三輪)	92
音羽と黒崎の印相	(音羽・黒崎)	71	三輪童子	(三輪)	93
六万ヶ谷	(八井内)	71	金の鎧の落武者	(三輪)	95
天狗杉	(初瀬)	72	五十鈴媛の命	(茅原)	96
未来鐘	(初瀬)	74	玄資僧都(玄資庵)	(箸中)	98
曾我地藏	(初瀬)	75	箸墓	(箸中)	101
塗りつぶしの絵馬	(初瀬)	77	海柘榴市	(金屋)	104
龍野	(和田)	78	丑の時参り 祈り釘	(芝)	114
天狗	(白木)	78	弘法大師の井戸と作物		116
泊瀬斎宮	(小夫)	81	金鶏伝説		118
寝地藏	(小夫)	84			
蓑丸長者	(笠間)	85	◎お国自慢(地名唄ひこむ唄・名所唄)		122
神々の祭礼	(三輪)	86	◎迷信		126
三輪神婚説話	(三輪)	88	◎お伽話の部		130
三輪山の猿	(三輪)	90	こぶとり・猿蟹合戦		

桜井の地名の起源

(谷)

履中天皇三年十一月六日、帝が両枝船（二艘をつなぎ合わせた丸木船？）を、前年に作られた磐余の池に浮かべられ、皇后黒媛と別々にお乗りになり遊宴を催されました。

膳臣余磯（あれし）はお酒を奉った時に桜の花びらが、帝のお持ちになっている杯に散り落ちたのでした。

帝は、この季節はずれの桜の花に驚かれて、物部長真膳連を呼んで詔をされました。

「この桜の花、時季はずれに咲いた桜は、いったいどの桜か調べてこい。」と。

長真膳連は、ひとり花を尋ねられ、掖上の室山（御所市室）に咲いている桜の花を見つけられ、帝に献上されました。

帝は大変珍しがられて、自らの宮を磐余雅宮桜と名付けられました。

そして、花を見つけあてた長真膳連に雅桜部造御酒を奉った膳臣余磯には雅桜部臣と姓をお与えになりました。

そして、その長真膳連は、詔を奉じて掖上室山から桜樹を移し、等弥郷の清水の湧

き出る泉のほとりに植え、桜井田連男祖にこれを監視させられました。歳月が移り、皇居もしばしば変わり、桜の木もわからなくなつた。

その跡に桜井寺が建てられたが、戦国争乱で寺が焼け、わずかに草堂一つを残すのみになつたが、桜井の清水は千四百年を経た今日でもこんこんと湧いていると言う。

（権僧正公算の「桜井清水碑」よりの引用）

同じ文政の頃の藤堂藩士入交太郎左衛門の「桜井茶話」に

「この桜井の里に小さき井戸がある。かたわらに桜の木が一本ある。桜井と言う名水だという。
（大和志に桜井は桜井谷村）

西行法師の歌に「・・あらおもしろの桜井の水」というのは、ここで詠んだものと里人が誇り伝えているが、大和には桜井というのは二、三か所もある。」として、たんに桜樹のかたわらに清冷甘味な清水のあふれる井泉「桜の井」という名水があつたのを桜井の地名の起源だとしている。
（日本書紀、桜井町史による）

鬼がらの木

(桜井)

鳥見山の麓を東の方へ行くと、昔、そこに大きい森があったんやそうや。

周囲五メートルもあるような杉の木がたんよあったんやと。

そのころ、毎晩、ここに青い火が見えたんやそうや。付近の人は、この火を見るとみな怖がって戸を堅とう閉めてんと。

ある晩、十二時ごろに村中の牛がみな鳴き始めてんと。翌朝、おそるおそる牛に餌をやるに行くど牛が見えへんねと。そして骨だけになって森の大木に掛かったんやそうや。

そやさかに、鬼がら森というど子供だけでなく、大人も身ぶるいをしたそうや。

(大和の伝説による)

万年青の流行

(桜井)

明治十五年頃、万年青(おもと)の盆栽が流行して、雑物でも一株十五銭以上、龍

物は、一円以上で売買され、その後、はやらなくなったが、二十二、三年頃、再び流行した。これは行商人が山師のはやらしたもので、あくどい手にかかった者もいた。

桜井町の軍医の中川義正氏は七、八百円の損をして倒産の憂き目に遇った。仁王堂の森田新七氏は、金龍丸という万年青を三百円で買い失敗した。安倍の高田の高岡長四郎氏も同じ憂き目にあつたとか。当時、米一石で十一円、十三円ぐらいの時代である。

夏の暑い時、倉の中の涼しい所で、万年青の葉をぬれた布でふき、汗をふきながら、

うちわであぶっている人もいたと父から聞いたことがある。

吉野だぶのガタロ

(上の宮)

池などにガタロと言うのがいて、人を沈めて血を吸うものだと言う。

吉野だぶという深みが河西の上にあつて、よく泳ぎにいったが、昔、牛が深みに引き込まれたとよく聞いた。

両岸、崖になり川巾が狭くなり、深かった。上手に井戸があると言われた。

